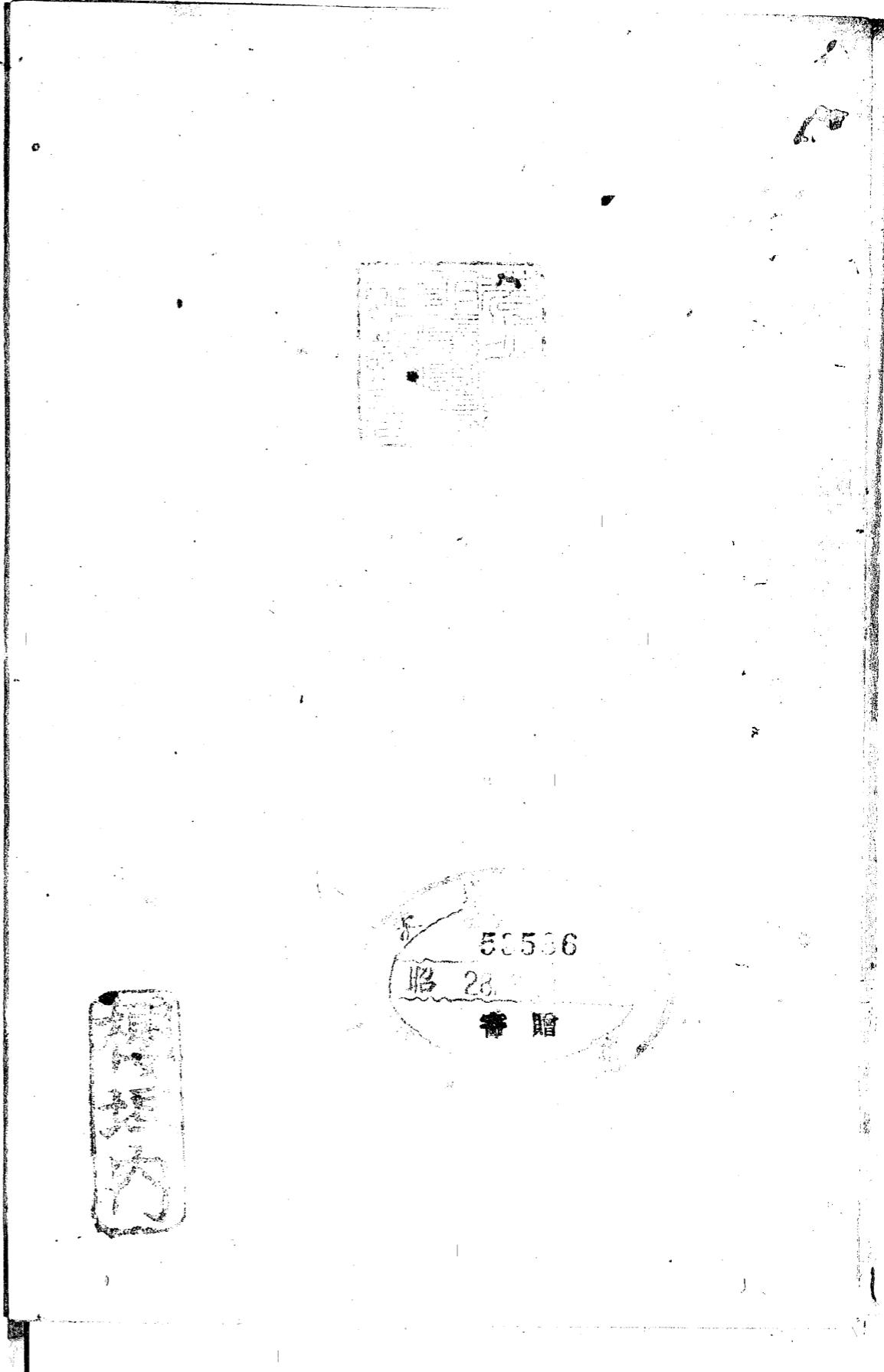


タイトル番号：0078

書名：藤垣内翁略年譜

1冊

| 藤垣内翁略年譜 | | | | | | | | | | | | | |
|---|------------------------|----|----|----|----|----|----|----|----|----|-----|-----|-----|
| 寶曆二月十七日夜子刻伊勢國飯高郡松坂の里にて生れ 六丙子幼名稚懸常松とひ | | | | | | | | | | | | | |
| | 一歳 | 二歳 | 三歳 | 四歳 | 五歳 | 六歳 | 七歳 | 八歳 | 九歳 | 十歳 | 十一歳 | 十二歳 | 十三歳 |
| 明和元申 | 同人小謡曲を習ひ始める | | | | | | | | | | | | |
| 二 | 父棟隆ぬ一の意よりひもて古今集を素讀一章免る | | | | | | | | | | | | |
| | ○藤垣内翁略年譜 | ○ | 一 | | | | | | | | | | |
| | 十歳 | 九歳 | 八歳 | 七歳 | 六歳 | 五歳 | 四歳 | 三歳 | 二歳 | 一歳 | | | |



| | | | | | | | | |
|-----------|----|---|----|--|--|--|--|----|
| | | | | | | | | |
| 三 | | 歌とみ始め終ふ | | | | | | 十一 |
| 四 | | 竹内好正小ほきて孝達四書五經と去年の冬とくつまく くらし始め終ふ好正も直道の父なり | | | | | | 十二 |
| 五 | | 鈴屋翁の教子小振り終ひて茂穂と稱し十二月三日須要直見 家講會の歌稻葉集別巻の初出 | | | | | | 十三 |
| 六 | | | | | | | | |
| 七 | | | | | | | | |
| 八 | | 四月比より大御神と御蔭森とりよ事よりを俗言交ふ 記一終ふ是著述の始なり | | | | | | |
| 九 | | 三月五日旅立ちて鈴屋翁とくらぶ芳野は 物語ひて十四日家帰り終ふ 十一月二日 | | | | | | |
| 元 | 壬辰 | 元服一終ひ十歳と神後三十才と改名もく | | | | | | |
| 二 | | 三月十日叔父山口昭方と伴ひて木曾路を へそ廿五日江戸か着終ひ四月廿二日江戸を たちて鶴岡八幡宮秋葉山あぐにまくして 五月四日帰り着き終ふ | | | | | | |
| 草枕の日記 東路記 | | 著述 | | | | | | |
| 十八 | | 餅袋の日記 吉野の 記行也 | 十七 | | | | | |

| | | | | | | |
|---|---|-------------------------------|--|--|-------------------------------|---|
| 六 | 五 | 四 | 三 | 二 | 一 | |
| 十月十日鈴屋翁とちどりが若山やまと一筋ひ殿の御前 <small>おまへ</small> と又吹上の 尼公の御前 <small>おまへ</small> とあくまで賜物うきびの内十一月廿三日若山をうちて京出十二月四日家 <small>いえ</small> を出 | 正月十四日妻の君 <small>きみ</small> とあらわす十一月 鈴屋翁とよもに京よりのわたりて新造内 裏 <small>うち</small> の御遷幸 <small>ごせんこう</small> と辯えひ | 二月須賀直見の女を娶 <small>め</small> ひ | 三月 鈴屋翁の京から一筋 <small>いつす</small> を訪 <small>たず</small> むとす 三月晦 <small>え</small> 日か出 <small>で</small> うちひ京より 妙法院の宮に まゆらで哥 <small>お</small> と奉 <small>まつ</small> て四月十日京をうちて美濃 路 <small>じ</small> と名古屋 <small>なごや</small> へとあるとあらわす廿日家 ふらりとまよひ 二月六日長女 <small>ながめ</small> を 出生八月晦 <small>え</small> 日早世 | 正月 鈴屋翁とよもに京よりのわたりて新造内 裏 <small>うち</small> の御遷幸 <small>ごせんこう</small> と辯えひ | 二月須賀直見の女を娶 <small>め</small> ひ | 正月十四日妻の君 <small>きみ</small> とあらわす十一月 鈴屋翁とよもに京よりのわたりて新造内 裏 <small>うち</small> の御遷幸 <small>ごせんこう</small> と辯えひ |
| 名草北濱 <small>なぐさほりはま</small> と 後年鈴屋翁の紀見 <small>きみ</small> の めくらと合刻 <small>あわせこく</small> て双玉記 <small>しょうぎょく</small> 行 <small>ゆき</small> と | 秀歌百人一首撰成 <small>しゅうかくひゃくじんいっしゆそんせい</small> | 三十五 | 三十六 | 三十七 | 三十八 | 三十九 |
| ○藤垣内翁畧年譜 | 古田家譜稿 <small>こだいがひこう</small> | 三十五 | 三十六 | 三十七 | 三十八 | 三十九 |

| | | | | | | |
|--|--|--|--|---|---|---|
| 四 | 五 | 六 | 七 | 八 | 九 | 十 |
| 五月朔日豊前國中津人渡邊重名の京出 やまとをうちひとて出 <small>で</small> むとす | 九月中村正伸の女をめくらめくら | 八月十六日松平周防守殿の江戸を出 <small>で</small> るとす | 奥 <small>おく</small> のふきとてほくとて物 <small>もの</small> をまわすとす | おひねくとてほくとて物 <small>もの</small> をまわすとす | おひねくとてほくとて物 <small>もの</small> をまわすとす | 八浦玉の稿 <small>こう</small> を書 <small>か</small> 始め |
| 元巳酉 | 寛政 | 大神官御遷宮 <small>おほみやみゆきゅう</small> と四月二日海 <small>うみ</small> を九月朔日 | 二月十七日長男兵衛建正 <small>けんじゆう</small> と出生幼名常松 後 <small>あと</small> お敷負萬磨唐 <small>まんまとう</small> とちひき | 三月十九日鈴屋翁とよもに名古屋 ふきのとて四月二日海 <small>うみ</small> を九月朔日 | 三月十九日鈴屋翁とよもに名古屋 大神官御遷宮 <small>おほみやみゆきゅう</small> と四月二日海 <small>うみ</small> を九月朔日 | 三月十九日鈴屋翁とよもに名古屋 大神官御遷宮 <small>おほみやみゆきゅう</small> と四月二日海 <small>うみ</small> を九月朔日 |
| ○ | 藤垣内翁畧年譜 | 千枝松後兵馬 <small>せんじまつ</small> とよもひき | 十二月六日二男左衛次清島主出生幼名 | 三月十九日鈴屋翁とよもに名古屋 大神官御遷宮 <small>おほみやみゆきゅう</small> と四月二日海 <small>うみ</small> を九月朔日 | 三月十九日鈴屋翁とよもに名古屋 大神官御遷宮 <small>おほみやみゆきゅう</small> と四月二日海 <small>うみ</small> を九月朔日 | 三月十九日鈴屋翁とよもに名古屋 大神官御遷宮 <small>おほみやみゆきゅう</small> と四月二日海 <small>うみ</small> を九月朔日 |
| ○三 | 藤垣内翁畧年譜 | 三十三 | 三十二 | 三十一 | 三十 | 二十九 |
| | 藤 <small>とう</small> のとも花 <small>はな</small> 行 <small>ゆき</small> と 名古屋記 <small>なごやき</small> | 三十四 | 三十五 | 三十六 | 三十七 | 三十八 |

| | |
|--|--------|
| 正月 鈴屋翁より文机を譲り候。其文 一矢と京中へはまことに其頃七十とらひ。去年の冬 才四十餘年う間用ひまし。一机をあと。寽政十二年正 月三日大平小ゆづるとてとくそでちへる。年をへておの文 机よりいふと我せーること承ります。此機も 今師の家へゆきて靈祭の時小用ひます。四月七日本告 父棟隆圭才十一歳めてみまわへ候。此頃へて實入といひき 同十七日二女熊子出生九月十七日鈴屋公山室山専シテ おくつき所をかひてさるあ候。さて師翁才才ひだまよ 十一月廿日 延の召ふよらも鈴屋翁才才若山小出事 ちそ年を越えて旅居へたまへ | 答村田春海書 |
| 二月三日寫物御用をつとむへき。仰を意 思ひ。廿三日鈴屋翁才才若山をへゆきてかか たるやへ出候ひ初體をへま。三月朔日松阪か ゆく。是の四月鈴屋翁京まみてみまく。妻の 病よよとて此處へゆき。此妻の君六月十七日身 まつり。九月十九日復々鈴屋翁才才ほひて廿 九日身まつり。 | 四十五 |
| 教子既小貳十餘人鈴屋翁沒後 甚すに隨後の教子百餘人 | 十二 |
| 元酉 | 四十六 |

| | | | |
|----|----|----|--|
| | | | 正月二日母刀自六十歳にて身退る |
| 七 | 八 | 九 | 母刀自の服ぬきとて二月十六日舍弟昭隆 ナミヒサトモニ二見浦より身滌一ノ 大神ノタマツテノナリ |
| 十 | 十一 | 十二 | 十一月通称を大平と改め居 玉鉢百首解 <small>七月稿成 後年刻</small> |
| 十一 | 十二 | 十三 | 八月新座町となり歌のまゝの新室と 名づけてやうそ藤姫内と名づけ居 正月廿一日鈴屋翁よりに旅もぢて若山 小出詔ひて 御前より賜物をとがき居 此どう御よきとて二月廿四日鈴屋翁の猶 子より詔ひて廿八日家より上り居 三月十六日鈴屋翁の七十の誕生日三井 高蔭社別業うそ人ふほくへ居 |
| 十四 | 十五 | 十六 | 已未紀行 |
| 十五 | 十六 | 十七 | 四十二 |
| 十六 | 十七 | 十八 | 四十三 |
| 十七 | 十八 | 十九 | 四十四 |

五

| | | |
|---|---|---|
| 三月八日教子の請よりて山田ふちのと 講説あり十八日家より歸る | 六月五日四女小百合子出生 | 四 |
| 十月八日教子の請よりて山田たり志磨のき 羽を講談あり建正至清島を大友直枝より ともりて廿七日家より歸る | 八月又山田ふちのと講談あり又鶴 の教子の請よりて建正至清島を大友直枝より 若山ふちのと講談あり建正至清島を大友直枝より 式源氏物語を詳解き島石見守其家 杉原平馬の家塩田光成の家あるとて古事 記後撰集や何やと解き詔より十一月 殿の 御本の萬葉集改点校正して奉る(き)仰言の り十二月二日御前より萬葉集源氏物語を 進講し詔より賜物のとおり同九日家 格をより俸を増し若山より移り住む 新撰風土記を撰進しへき命を慕ひて若 山より越年 | 五 |

五十一

| | | |
|---|-------------|-----|
| 神號類聚 事物類聚 | 古言類聚 古書地名類音 | 五十一 |
| 此項より之神の書古稿を 起して國史萬葉集をさめ 古記古風土記何くも書 ほぐして書出むこと詔 タれと事ありくて半ま いとを後年内遠入 小物せよとゆけり詔 | 五十二 | 五十三 |

五十二

| | | | | |
|---|---|---|---------|-----|
| 文 化 元 子甲 | 三 | 二 | 一 | 四十七 |
| 教子の請よりて十一月朔日二男清金を ちのうひて名古屋からて萬葉集源氏 物語をとて講へ詔 | 二月廿二日學道出精よりて俸を増す 四月朔日三女藤子出生 | 七月 殿の仰言よりて鈴屋翁の著述 獻らる書とて詔へたまげやへの命 うて同月廿一日十三種の書とて詔 後年印刻の度に自のをもとへまつた もよみ | 近世三十六人撰 | 四十九 |
| 友問平答 | 伴信友よりあちの間條よ 答へるへるをわらめてうへ 表題一詔 | 四十 八 | 四十八 | 四十七 |
| 鈴屋翁の遺命よりて稿 をちのうひきと事とは きわざかめをわらせて 稿をとへ詔 | 鈴屋翁の遺命よりて稿 をちのうひきと事とは きわざかめをわらせて 稿をとへ詔 | 五十一 | 五十二 | 五十三 |
| ○ 藤垣内、羽畠年譜 | ○五 | | | |

| | | | | |
|-----------|--------------|-----------|---|--|
| | | | | |
| ○ 藤垣内羽畠年譜 | 文政 元 寅 | 十二 | 二月 主として歌奉事するより賜物あり 三月十六日翁翁の六十晩會沼野記より別業として題 寄木祝やうかと経方をうむも清哥の事とすあわら りて詞の繁山とす廿三日建正主清島主京うけ松 坂山出でち故大奥の御方うち清哥の事とすあわら | 二月 も不殿の御前より七十社御賀の翁建正主清島 主として歌奉事するより賜物あり 三月十六日翁翁の六十晩會沼野記より別業として題 寄木祝やうかと経方をうむも清哥の事とすあわら りて詞の繁山とす廿三日建正主清島主京うけ松 坂山出でち故大奥の御方うち清哥の事とすあわら |
| ○ 六十 | 十三 | 假字ひさるひん | 正月廿三日京小町のにて錦小路から釋舍にて日本紀 後撰集万葉集部と講説あり二月九日より一條殿の 太政所君の御前と源氏物語萬葉集百人一首を詠 よき物の歌を賜物あり十八日伊勢ふくのにて所 講談あり五月十日下歸り着きゆく | 正月廿三日京小町のにて錦小路から釋舍にて日本紀 後撰集万葉集部と講説あり二月九日より一條殿の 太政所君の御前と源氏物語萬葉集百人一首を詠 よき物の歌を賜物あり十八日伊勢ふくのにて所 講談あり五月十日下歸り着きゆく |
| ○ 六十一 | 十四 | 春錦 上京記行あり | 五月 外宮御柴東の裂手十三種 古事記傳六 帙石上私淑言やうを 殿の御前と奉呈 よき物の歌を賜物あり十八日伊勢ふくのにて所 講談あり五月十日下歸り着きゆく | 五月 外宮御柴東の裂手十三種 古事記傳六 帙石上私淑言やうを 殿の御前と奉呈 よき物の歌を賜物あり十八日伊勢ふくのにて所 講談あり五月十日下歸り着きゆく |
| ○ 六十二 | 神樂歌新釋成 | 夏衣 伊勢記行あり | 藤垣内歌集成 <small>古風歌の家集</small> 稻葉集成 <small>後年刻 後世風の歌の家集</small> | 藤垣内歌集成 <small>古風歌の家集</small> 稻葉集成 <small>後年刻 後世風の歌の家集</small> |
| ○ 六十三 | | 六十一 | | |

| | | | | | |
|----|-----------------------|--------------------------------------|--------------------------------------|---|---------------|
| | | | | 二月廿三日若山をもとて初瀬路をへて松坂より五月二日 大御神宮を參りて六月八日松坂をもとを妻子たちをみて十二日若山を乞 本町四十目小寓居——終 | 六 |
| | | | | 毎朝并神式 | 五十四 |
| | | | 百人一首梓弓 | 五十五 | |
| | | 源氏物語樂事抄 | 荅富田美寧書 三大考辨 假作設象 | 五十六 | |
| | 五七材 | 馬毛名合解 後年刻 | 五十七 | 五十九 | 十一月呂ウセ家格をもとめ終 |
| 十一 | 十月風土記の撰ふとて巡郷の事——終 | 三月古事記傳五帙玉勝間やとを御前より進らばき仰言乃く七月より奉りて獻一終 | 三月古事記傳五帙玉勝間やとを御前より進らばき仰言乃く七月より奉りて獻一終 | 九 | 十一月呂ウセ家格をもとめ終 |
| 十 | 十一月廿四日四女小百合病死 | 十一月廿四日四女小百合病死 | 十一月廿四日四女小百合病死 | 八 | 十一月呂ウセ家格をもとめ終 |
| 九 | 十二月廿日廣瀬辨財天山より移り終 | 十二月廿日廣瀬辨財天山より移り終 | 十二月廿日廣瀬辨財天山より移り終 | 七 | 十一月呂ウセ家格をもとめ終 |
| 八 | 二月十九日三男安松主出生 宅地をもとまわり | 二月十九日三男安松主出生 宅地をもとまわり | 二月十九日三男安松主出生 宅地をもとまわり | 六 | 十一月呂ウセ家格をもとめ終 |
| 七 | | | | | |
| 六 | | | | | |

四月十日出立て松坂より下室詔ひ教子の乞ふる

て神樂歌源氏物語をつゝむおとさゆ閏四月智山

田よりて足代弘訓のおもやうや大抜調を考古音源物語

帝木巻で譜一もあひ十日山田を出で京の縁金をさ

アキテ万葉集十三の巻後撰集をとせ給ひ廿五日

より一條殿下比大奥を源氏物語頃廢明石の巻を進講あり

賜物をくわへば一條町から家をとりて路へ

おも 皇太后宮の御乳母をし越井といふの家をあれ

郁子の祖母をり後此官より翁の事とも思ひとぞ

ひりて毎年かくはなせられると 太后的御本うち

かくはな 院のまゐの巻竟か傳へず惟アラ翁

一世のいわくがさくあきらめどひふあも此た沙智恩院宮富小路殿がとくも奉り沙

築檢校中山信名をと翁を訪ひ來らる五月八日双林寺にて歌會ありて人を笑ひ

けり十九日若山をゆつとまほへ廿六日長男建正主身より次九月吉四男楠橋永平主出生

二月古事記傳七帙小都日記後撰集新抄ちと

其餘四五種を副さへ例の献

此頃御前より歌や文やときくへき作をとす

ちとく

花山口

萬葉山常百首再撰刻成

花山口

六十四

催馬樂風俗歌新釋の稿

をおこへる事ありて

未成にて終り

濱木綿百首撰成

因よりよ建正主の著述

古事記傳追考の稿清島

主の著述竹のさとと此項

あきり此二人の歌集も

かくはな 院のまゐの巻竟か傳へず惟アラ翁

一世のいわくがさくあきらめどひふあも此た沙智恩院宮富小路殿がとくも奉り沙

築檢校中山信名をと翁を訪ひ來らる五月八日双林寺にて歌會ありて人を笑ひ

けり十九日若山をゆつとまほへ廿六日長男建正主身より次九月吉四男楠橋永平主出生

二月古事記傳七帙小都日記後撰集新抄ちと

其餘四五種を副さへ例の献

此頃御前より歌や文やときくへき作をとす

ちとく

花山口

萬葉山常百首再撰刻成

花山口

六十五

四

三月十八日鈴屋翁後室身うちて病中清

島をとて松坂小出うちをもく九月二日

清島主を身あらむ十月 有徳院大將軍の

御前の唐若くまつて時松竹小雀の傳墨

画の掛幅を左うそて傳へてを献へる

十一月神代紀草牙鉗狂人衝口發後鈴屋集

稻葉集春錦夏衣門の落葉歌をとす 別歌

御前小出うちあらむ 同二十六日家補増一

もく

正月十二日三男安松主病死二月二十二日中の町

此今家の家を移す沙八月十九日古事記傳八

帙を例の獻一絵ひそ全篇上木落成の由を

申上候ふとく御序文の代として 大納言の

君の御前の詩筆を古事記傳との四文字を語り

此事も傳の首卷小詳をも十月國內の神職小翁の

教をうくべき由命よりて同古寺社府の局中を

祝詞を講説一詠の奉行職を充て下司

すて社家とくとく小聴聞

五

正月十二日三男安松主病死二月二十二日中の町

此今家の家を移す沙八月十九日古事記傳八

帙を例の獻一絵ひそ全篇上木落成の由を

申上候ふとく御序文の代として 大納言の

君の御前の詩筆を古事記傳との四文字を語り

此事も傳の首卷小詳をも十月國內の神職小翁の

教をうくべき由命よりて同古寺社府の局中を

祝詞を講説一詠の奉行職を充て下司

すて社家とくとく小聴聞

六十七

倭意三百首

後年刻成

六十六

古事記傳首卷

後年刻成

二月十五日 殿の御前小古事記の神代を
進講。此時布衣着用をへき仰言。後
神樂哥庭燎韓神其駒歌とを拜聴。

六

三月廿二日又御樂辨聽ノ如ニ
和琴より管弦羯鼓太鼓二十餘人合奏ナリ
四月姪健藏有郷主小月俸を給ム
五月二十九日内遠主來訪ナリトモ久之翁よ
逢候ム十月十九日二十五日西濱の御殿
十一月藤宣

内にて歌會の教子の歌とを此のちも
月毎小さくすらへ一との命あらずて
御題をも詮へり

九月十六日京へ出立て廿一日北山修學寺小院の帝於御幸一宿を滞り此下より事ハ秋錦小行ノ十月十一日家は帰る

卷之三

正月廿四日 大殿の御前の御八十歳賀又
歌奉祝を三月二日多羅尾の氏純主の招請で
よりて芦野の花見立出でまひ七日小説

賀會行、賀茂、吉鷹、立靜子、子出席

八月十七日又和歌浦水鷲楊子とまくらの約
十月十六日奥諾とくらをくらむ

正月廿九日梅林先生來見（言未畢
文あり事あち）
作言

十一月七日健亭春庭翁六十六歲之身

十二月廿二日伊勢山田の安田廣治より指揮
得て西濱の 前大納言の君故御前小

御舞樂之記

卷八

秋錦 一名紅葉の御幸

冬衣
未脱禁

萃九

藤垣文集撰成

花盛の日記 芳野記行

自撰歌

七十

紀國百首撰成

八十浦玉中卷刻成

天保

元
寅
庚

正月元日前大納言の君と先づせ終へる

御紋の御肩衣をうけ候三月十八日八浦

王中巻鈴屋翁畧年譜詞通路其餘もま

け候又熊野浦とも白き珊瑚珠の出

りを仲言ふよも其文のまゝ同三月ゆけ

候ふ七月内遠大人入家

をかぢう假字の辨

二

二月十日格祿殊も老の後もそ
出精一月もあらずより西濱の御前より
殊少賜物うり三月二日命うりて内遠太
嗣子うりて藤子を娶合せ候ふ六月うり内
遠大人風土記新撰の員ふ加ちうて候ふ

三

四月西濱の御亭の名を翔燕亭とつけて奉
是も其餘御笛筒の銘等もそ撰進一
路ひ又歌もあらね候ふこと多くゆり
十二月廿二日ニ女熊子をまつて候ふ

古學要

隨筆稿 年々が多き合

七十六

七十七

七十五

四

正月十九日御能を見候ふ。前大納言の君の正三位

からまへて候る御よろこびめぐら或人の此うごだるふ

翁文をうなぐて奉もあらず賜物うり六月朔日

紀國忠孝傳の序文を書き候ふ此ううやあらむ出候ひ

てうちよ一語へきと猶快きをもくハ御殿も坐候ひ

何うれの事よ。かうだらへり年とう日記とす物うが

路うの八月二日まへまほりの一路へり作文ハ阿波

藩士賀島長總の直靈考の序文稿をあらそかきは

路うそともおきひり。此後も一語へるもくを起

出候ふ毎年重々行候る中学生文道の事歌の

事あらじきほひよはねはねの事もまづかばら

ちへ九月十一日の曉からつひふうせ候ふ後の名を國

足八十言靈大人と称し普通の添跡を和心院意

富必樂居士と生きて奥墓ハ若山湊吹上寺ふり鈴屋翁とむとく笏のうわら

すを靈牌うて影像うそと大人の家るハ祭う候ふ此肖像ハ今年の三月冉

波人長谷川素戸とくは画工來居てうだくうかく似ゆり上よりうれ

路する哥ハ 真直さうや坐とだぶあひひと神のまゝの道うねそチーおハ倭意三百

首のともあかぬよのうひう引直一語へるうつう此やの事ハ内遠大人の記候ふ終焉

八十浦玉上巻刻成
同下巻脱稿
藤垣内集遺稿

此餘も紙三から五枚
なり考説もとの稿又古
書の抄出哥文の論や歌
合の判やと数多うれと皆
省きう

七十八